

(11) 偕楽園（水戸市）

偕楽園は、金沢の兼六園、岡山の後楽園とならぶ「日本三名園」のひとつで、天保13年（1842年）に水戸藩第九代藩主徳川斉昭によって造園された。斉昭は、千波湖に臨む七面山を切り開き、領内の民と偕に楽しむ場にしたと願い、「偕楽園」と名付けた。その由来については園内の偕楽園記碑に記されている。約13haの園内には軍用梅干の確保を兼ねて植えられた約100品種・3000本の梅が、早春には咲きそろう観梅客で賑わう。

偕楽園は早春の梅のほかに、四季を通じてその季節の見所があり、春にはサクラ、初夏にはキシマツツジ、真夏には緑あざやかなモウソウチクやスギ林、秋にはハギの花やモミジを楽しむことができる。また、偕楽園の眼下に拡張した新しい公園は、梅を中心とした田鳴、狸々、窈窕の各梅林、芝生広場の四季の原、水鳥が遊ぶ月池などが点在し、ゆったりとした広大な風景を楽しむことができる。



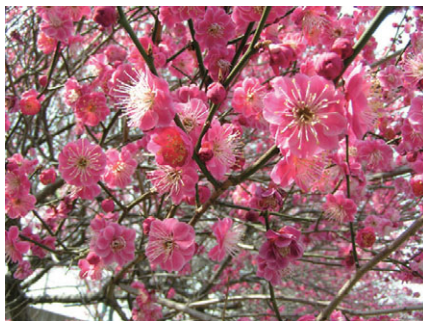
梅の頃の園内



好文亭からの園内の様子



モウソウチク林



紅梅と白梅



図 5-16 春の偕楽園（平成18年3月）